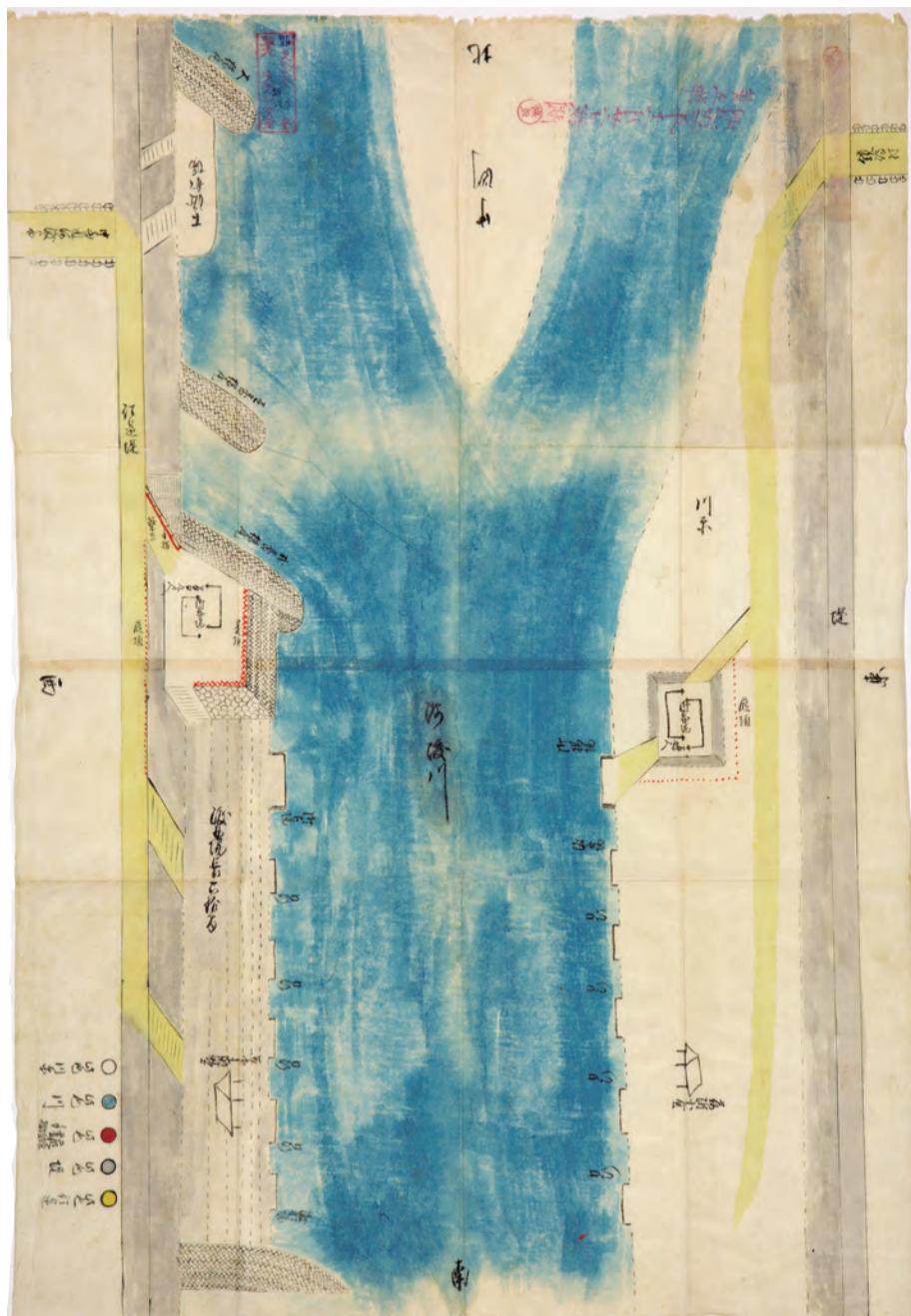


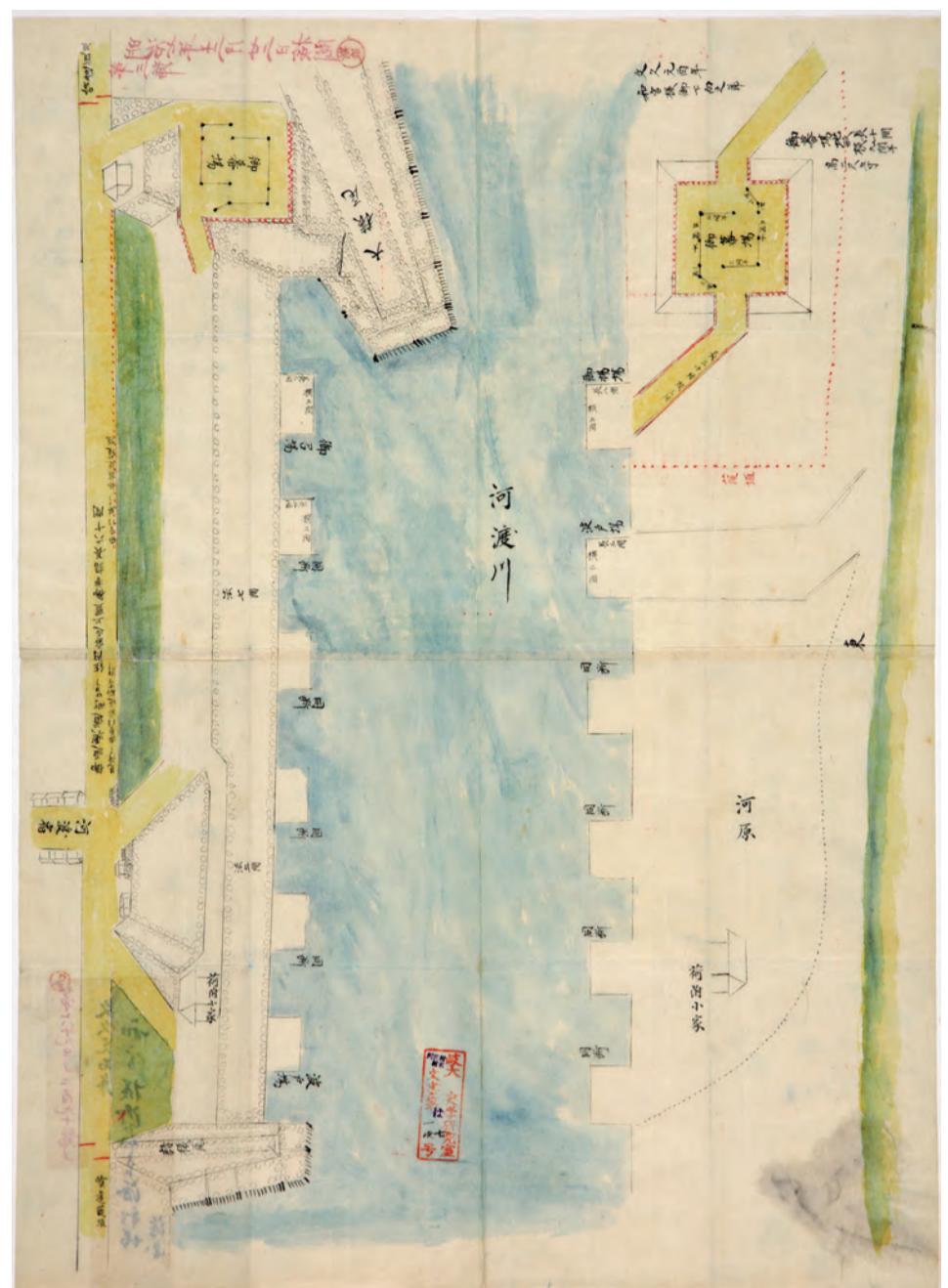
◆ 中山道河渡宿の渡船場



天保2年(1831) 有君様御下向渡船場絵図

(岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵)

13代將軍徳川家定へ輿入れするため江戸へ向かう有君(鷹司政熙娘)が長良川(絵図では河渡川)を渡る際の渡船場の設備を描いた絵図です。画面左上の中山道(黄色)を出て東に「下渡船場」、それより南に「渡舟場長六拾間」と記されています。有君は整備された南の渡船場を使用しました。

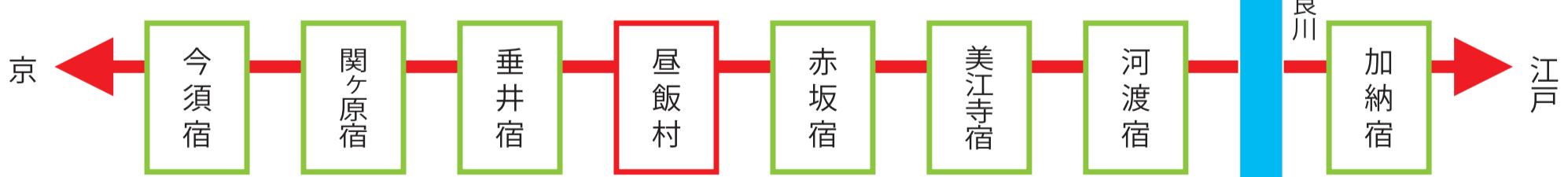


文久元年(1861) 和宮様下向之節渡船場絵図

(岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵)

14代將軍徳川家茂に輿入れした皇女和宮が長良川(絵図では河渡川)を渡る時の渡船場の設備が描かれています。画面左下の中山道(黄色)を出てすぐ東の渡船場が整備されています。有君の後に13代將軍家定に嫁いだ寿明君(一条忠良娘)も、和宮と同じ場所の渡船場を使っています。

河渡宿(河渡村)は現在の岐阜市西部にあたり、長良川の右岸に位置しています。江戸時代、ここは中山道の宿場の一つで、長良川を渡るための渡船場でもありました。



江戸時代、中山道は京都から將軍家へ嫁ぐ姫君たちの通行にたびたび使われており、当然昼飯村も通過しました。岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵の村木家文書(河渡村の庄屋役などを勤めた家の史料)には、有君や和宮が長良川を通過した際に整備された渡船場絵図が残されています。絵図から、この姫君たちは同じ渡船場を使っていないことが確認できます。この地域は、いくつかの河川が長良川に合流し、また川が湾曲する所であったため河渡宿側は削られやすく、対岸は砂が溜まりやすい場所でした。このため、河渡宿の渡船場は位置を何度も動かさざるをえなかったことが、様々な絵図から読み取ることができます。